ウィークリー・ブレッド・オブ・ライフ

（2025年1月6日（月）～12日（日））

岸和田聖書教会
牧師　栗原純人

「ブレッド・オブ・ライフ」とは「いのちのパン」（ヨハネ 6：48）。「わたしはいのちのパンです」と言われるイエス・キリストさまに目をみことばによって食しましょう。今日一日の力です。以下の手順を参考に聖書を読みましょう。

1. 静まります。「しかし私は　義のうちに御顔を仰ぎ見　目覚めるとき　御姿に満ち足りるでしょう。」（詩篇 17：15）。神さまがあなたを呼んでおられます。
2. 声に出してその日の聖書日課を読みます。
3. 気づいたこと、わからないことなどをノートに箇条書きし、その後『みことばの光』、このブレッド・オブ・ライフの文章を読みます。わかったことがあったら、さらに書いてみましょう。
4. もう一度、聖書日課を読みます。違う響きがあるでしょうか？
5. 祈りましょう。実際に声に出して。そして祈りの中心部分を書いてみましょう。一日の終わりに、今朝の聖書を思い起こし、みことばがどのように生きたか、思い巡らしましょう。

2025年1月は「ルカの福音書」を読み進めます。

1月6日（月）

今日の聖書日課：ルカ1：39～56

主によって語られたことばは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」

ルカ1：45

上記の聖句は、エリサベツがマリアに語ったことば。エリサベツが語った「幸いな人」とは誰でしょう？それは目の前にいるマリアです。マリアこそ「あなたのおことばどおり、この身になりますように」（38）と主のことばを信じ、受けとめた人でした。同時にこの「幸いな人」はエリサベツ自身でもありました。マリアは聖霊に満たされ、自分をこのようなことばで励ましてくれるエリサベツとともにいたい、そう考えたのでしょう。なんと三か月もの長い間、彼女とともに過ごすことになります。すなわちこの時点で6か月だったエリサベツの臨月近くまでマリアはともにいたことになります。

あなたも、このようにみことばを信じる「幸いな人」と、意識して交わりましょう。

1月7日（火）

今日の聖書日課：ルカ1：57～66

すると、ただちにザカリヤの口が開かれ、舌が解かれ、ものが言えるようになって神をほめたたえた。

ルカ1：64

このときまで長い間、すなわちエリサベツが妊娠してから男の子が生まれるまで、ザカリヤは口がきけませんでした。それは神のことばを信じなかった彼への懲らしめのためでした。「見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。」（20）。そして、今生まれた男の子、目の前にいるこの子の名前を、かつて御使いが命じた「ヨハネ」としたときに、ザカリヤの口は開いたのです。そして彼は神をほめたたえました。私たちの口は、主のことばを信じ、御名をほめたたえるためにあるのです。

1月8日（水）
今日の聖書日課：ルカ1：67～80
罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与えるからである。
ルカ1：77
　かつて不信仰によって口がきけなくなったザカリヤでしたが、信仰によって舌が解かれました。そして彼は神をほめたたえました。そして聖霊によって預言しました（67）。その中でザカリヤは今、生まれたヨハネに向かって言いました。「幼子よ、あなたこそ　いと高き方の預言者と呼ばれる。主の御前を先立って行き、その道を備え」（76）。ヨハネがメシアの道を備えること、そして冒頭の聖句。メシアの「救い」が政治的・軍事的な救いではなく、罪の赦しによる救いであるとはっきり語りました。これこそ、聖霊が示された救いでした。

1月9日（木）
今日の聖書日課：ルカ2：1～21
男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。
ルカ2：7
　ベツレヘムの馬小屋（家畜小屋）。それがメシア、キリスト・イエスが生まれた場所でした。このとき、マリアとヨセフには居場所がありませんでした。仕方なくあてがわれたのが馬小屋。しかしここに神の深いみこころがあったのです。罪の赦しによって人を救うメシアは、その罪人のただ中に来てくださった。それを象徴的に表わしたのが、この出来事だったのです。最近「居場所がない」ということばをよく聞きます。しかし心配する必要はありません。イエス・キリストさまが、あなたの心を居場所としてくださったのだから。

1月10日（金）
今日の聖書日課：ルカ2：22～38
主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。
ルカ2：29
　幼子が生まれて八日が満ち、両親はこの子をかつて御使いが命じた「イエス」と名づけ、この子に割礼を施すためにベツレヘムから数キロにあるエルサレムに行きました。その時、この幼子を「待っていた」人がいました。シメオンです。聖霊に満たされていたシメオンは幼子イエスを見るとすぐに彼を腕に抱き、神をほめたたえて言いました。冒頭の聖句のごとく。「主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない」（26）と言われていたシメオンにとって死は恐れではなく、神のことば通り「去る」ことでした。それも安らかに。
　同じように、キリスト・イエスを信じる私たちにとっても、死は罰ではなく、恐れることでもなく、神の前で人生を全うしたしるしなのです。

1月11日（土）
今日の聖書日課：ルカ2：39～52
しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった。
ルカ2：50
　イエスが神のことを「自分の父」と呼ぶことを、マリアもヨセフも理解できなかった、と言います。これまでルカの福音書を読んできた私たちにとってはとても不思議なこと。明日 1 月 12 日（日）の礼拝ではこの箇所から「約束を思い起こそう」と題してメッセージが語られます。明日は、礼拝の中で田中和さんの成人祝福式、中高生たちのための青年祝福式を執り行います。